

第 6 回 市民参加懇談会コアメンバー会議
- 市民参加による政策検討会議 -
議事録

1. 日 時：平成 14 年 10 月 9 日（水） 10：00～12：10
2. 場 所：経済産業省別館 11 階 共用 1111 会議室
3. 出席者：木元座長（原子力委員）、碧海委員、小川委員、小沢委員、加藤委員、
露木委員、中村委員、吉岡委員
（原子力委員会）竹内委員
（内 閣 府）榊原参事官、渡辺補佐
4. 議 題：（１）「市民参加懇談会」の開催について
（２）その他
5. 配布資料
資料市懇第 6-1 号 「市民との懇談の場」に関するコアメンバーからのアイデア
資料市懇第 6-2 号 「市民との懇談の場」開催計画（事務局案）
資料市懇第 6-3 号 原子力政策の策定プロセスにおける市民参加の全体イメージ
資料市懇第 6-4 号 原子力発電所における事業者の自主点検作業記録に係る不正等の
疑いに係るこれまでの主な動き
資料市懇第 6-5 号 第 5 回市民参加懇談会コアメンバー会議議事録
（参考資料）第 39 回原子力委員会資料第 1 - 1 号
「原子力発電所における不正記録問題等の調査結果と再発防止に
ついて」（平成 14 年 10 月 8 日 経済産業省）
6. 審議事項
 - 最初に、原子力発電所における不正記録問題等について、事務局より資料市懇第 6-4 号及び参考資料に基づき説明。（木元座長）
 - ・ この参考資料（第 39 回原子力委員会資料第 1-1 号）の 3 頁目の再発防止の検討というところが、いろいろなご議論の後、このようなまとめ方になった。保安院の原子力安全規制法制検討小委員会において、「今までに何がよくなかったか」を議論し、再発防止の 7 項目が出た。 の「安全規制のルールの明確化」で、「事業者が行う『自主点検』」とあるが、これは、前回も申し上げたように、定期検査は国が義務付けているものだが、自主点検は事業者が自主的に行うもので、結果の報告義務もない。今回問題が発覚したのは自主点検の部分であるため、これを義務付け、報告を求めるようにするということである。クラックや傷があった場合、これを報告し、双方が協議して補修するなり、安全規制の範囲内ならそのまま運転するという事になったようだ。かなり国が介在するということが言えると思う。
 - ・ の「設備の健全性評価の義務付け」について、健全性評価というのはどういうことか少し補足すると、前回、維持基準についてお話をしたが、新品同様でなければならぬという技術基準はあるが、運転していくうちに磨耗したり、表面に傷がついたりといったことについて、どのように評価するかという基準が日本だけない。

そこで、欠陥があった場合に、どこまで許容できるのかという評価をしようということである。最初の段階では、「欠陥許容」や「許容欠陥の基準」など、「欠陥」という言葉が使われていたが、あまり響きがよくないということで、「健全性評価」という言葉になったようだが、またこれが議論の対象になるかもしれない。新品同様に運転していくことはできないので、ある程度の傷があった場合、どこまで許容するかということについての評価が出ると思う。

- ・ の「組織的な不正行為に対する罰則強化」や、 の「品質保証の確立」は当然あるべきことである。
- ・ の「申告制度の運用改善」とあるが、これは保安院がきちんと謝った部分である。申告者、つまり告発者、今回は GE の下の GEII という会社の日系アメリカ人だと申し上げたと思うが、その方は最初に GE を訴えていた。東京電力を訴えたのではない。しかし東京電力に関係があるということで、保安院が、東京電力に「こういう申告が来ている。これに係る調査をあなたのところもやってください」と伝えたようだ。東京電力の福島の特検をやった GEII から最初 GE を訴えたのだが、日本の保安院に申告したということである。保安院は、その方に「あなたの氏名は公開してよろしいですか」と聞いたところ、「それは困る」ということだった。しかし、後にもう1度尋ねたら、今度は氏名を公開してもいいということだった。その方の手紙には、「私は GE から危険人物とされている者です」ということまで書いてあったのだが、それを保安院はそのまま東電に、彼の手紙にはこう書いてあったということまで伝えてしまった。保安院側が、「この者は危険人物である」と言ったわけではないが、個人のプライバシーに関わる情報に関して、手紙まで公開していいとは言っていないということで、大変なミスがあったとして謝罪したもの。今後は慎重にやっていこうという決意表明である。
- ・ の「地域住民等国民への説明責任の確実な遂行（軽微な事象に係る情報の公開、共有化等）」とあるが、ここの部分は、これからもう少し議論が必要かと思う。軽微な事象とは誰が判断するのかということもあるだろうし、事業者の判断にしても、受け取る側は軽微とはとらないケースがある。だから、いかなる事象でも公開しろ、というほうが妥当ではないかと私は思う。また、「共有化」という言葉があるが、こういう事象があったからこういうことですよといくら説明したとしても、その事象を認識するレベルが専門家と一般国民とは違うのだから、共有化とあっさり言ってしまうので、もう少しお互いがわかるような説明責任を持たなければいけないということが、ここに入らなければいけないと思う。
- ・ は「安全規制行政の体制の充実」。規制が少し厳しくなるということではないかという感じがしている。
- ・ 今後のことだが、昨日の原子力委員会でも質問させていただいたが、資料 6-4 の中で1つだけ、循環ポンプのクラック、あるいはクラックがありそうだという兆候の問題について申し上げる。例えば A という会社と B という会社があって、クラックの有無を調べようとした時にその手法が違ふとする。A という会社の調べ方は、日本はもとより世界各国が採用している方法で、この方法でクラック及びインディケーション（兆候）があるかどうかを調べたら、この場合はなかった。ところが、もう1つの会社 B のほうが、新しい手法を開発したからこれで調べてみましょうと行

ったら、インディケーションが出た。健康診断でも、今までの医療技術だったら出ないものが見えてくるようなことがあるので、それと似たようなことではないかと思う。その結果、インディケーションが出ていたという情報が表に出て、「インディケーションがあるではないか」、ということになっている。保安院の解説にもあるが、異常はなかったというのは、Aの会社のほうが基準となるためである。Bはありそうだと言ってきたが、その手法はまだ取り入れられていないので、問題外ということがここに書かれている。しかし、これからの技術の進歩によっていろいろなケースが出てくるので、それをどうするかというのが次のステップになるのではないか。

- ・ 原子炉圧力容器の気密性の問題では、圧力をかけたとか、調整したという話があるが、これはまだ調査の段階なので報告書の中には入っていない。まだよくわからない部分があるというお話だった。疑問はまだ残っているし、説明責任も十分果たされていないとは思いますが、これまでの経過ということで、この資料を用意させていただきご報告させていただいた。また何かご疑問があれば、お申し出いただければ資料などそろえさせていただきます。

(1) 「市民参加懇談会」の開催について

- 事務局より、資料市懇第 6-1 号、6-2 号について説明。

(木元座長)

- ・ 資料 6-1 では、各委員からご意見をいただいたものをまとめさせていただいた。これ以外にご意見があれば、ぜひご発言いただきたい。資料 6-2 は事務局案で、例えばこういうことだろうかということでもまとめたものである。これを土台にして、随時補足していただきたい。

(小沢委員)

- ・ コアメンバーによるディスカッションが 2 時間とあるが、このメンバーでディスカッションするというのはおかしいのではないか。

(木元座長)

- ・ 前回、コアメンバーはどうやって絡むのか、コアメンバー同士の討議はやらないのか、聞きっぱなしではつまらないではないか、というご意見があったと思う。そこでいろいろ考えて、第 1 部と第 2 部という形にして、パネリストの方のご意見などを、例えば 1 部でうかがう。そして、会場からのご意見もいっばいうかがったほうがいい、討議をしたいというご意見を踏まえて、コアメンバーでご出席できる方はできる限り出席して、私たちはこう思ったということを絡めながら、会場からのご意見をうかがっていく、というスタイルも可能ではないかということ。1 部をそのまま通してやるのは難しいという気がしたので、1 部、2 部と分けた、ということでご理解いただきたい。

(小川委員)

- ・ そうすると、会場とのやりとりは 2 部のほうでということか。

(木元座長)

- ・ そのとおり。時間の配分はアバウトで 2 時間、2 時間と分けたが、1 部のほうはコンパクトにご意見をいただくということであれば、パネリスト同士の討論を問題提起

のような形で出していただいて、2部にもっと時間をとって、会場とのやりとりで展開していくということもできるだろう。あるいは1部から会場の意見をうかがっていくという手法もあるが、私の経験から言うと、1部からやってしまうと混乱してしまうことが多かったので、後半のほうがいいのではないかという気がする。

（小川委員）

- ・ 会場も変えるのか。

（木元座長）

- ・ そのままで、セッティングを変えるだけと考えている。できれば1部にご発言いただいた方も観客のほうに座っていただけるとありがたい。あの方の言ったことがわからないという意見が出てきた場合に、随時お尋ねできる状況をつくっておきたいと思う。

（吉岡委員）

- ・ 私は4時間と提案して、4時間になったので大変喜んでいるが、それでも会場の参加市民と話す時間が、これでは参加人数の割には非常に少ない構成だと思う。1部、2部の構成を変えて、第2部は市民が自由に話す場にして、コアメンバー討議は1部のほうに持っていけばいいのではないか。コアメンバーの討議というより、討議もしていいが、むしろパネリストに対するコメントのようなことを中心に第1部を構成し、第2部は基本的に全部市民の発言に充てる。

（木元座長）

- ・ 時間の配分はどうしたらいいか。アバウトで2時間、2時間としてあるが。

（吉岡委員）

- ・ 大体そのような感じでいいと思う。
- ・ 第1部は基本的に壇上で行ってもらって、フロアからの質問は受け付ける。第2部は自由討議で司会者ががんばって、ある方向付けをしつつフロアの人と進める。

（木元座長）

- ・ その場合、1部ではお呼びした方々とコアメンバーに壇上にお座りいただいて、まずお呼びした方にお話ししていただき、それにコアメンバーが絡むという形で、壇上は10人ぐらいになるかもしれない。2部のほうはフロアからとなると、1部の方は全部そのまま壇上にいるのか。

（吉岡委員）

- ・ 居たままがいいと思う。

（木元座長）

- ・ コアメンバーもそのままで、会場から意見をうかがうということか。

（吉岡委員）

- ・ フロア同士でやり合ってもいいし、壇上にいる人が発言するのがふさわしいならば、議長の権限でそのような運営をすればいいと思う。

（木元座長）

- ・ 会場から発言をとる場合、私の考えでは、常にスタンドマイクをフロアの前に立てておくのがいいと思う。今までいろいろ見聞きして、私も経験したことだが、ハンドマイクをフロアで誰かが持ち運びするというのは非常にややこしい。マイクを取られてしまって、そのグループがたらい回しでしゃべってしまうということもあ

るし、責任を持ってご発言するなら、マイクの前でご自分の名前をおっしゃるぐらいのことはしていただきたいと思う。スタンドマイクで顔の見えるところで対等にやらせていただきたい。イメージとして、形式はそういう形でよろしいだろうか。

（吉岡委員）

- ・ それでいいと思う。

（木元座長）

- ・ 1部、2部と分けなくてもいいという意見もあるだろうし、イメージとしていかがだろうか。

（中村委員）

- ・ 物理的に、休憩をとらないと4時間は無理だろうから、分けたほうがいいとは思う。
- ・ コアメンバー討議というのがちょっと気になる。コアメンバーは討議をするものなのかどうかという、もとの議論にまた戻るが、どちらかという私は吉岡委員に賛成で、1部は問題提起の色合いが濃くて、2部で市民の皆さんからの意見広聴という位置付けかなという感じである。問題提起を1部でするわけだから、もちろんその意見に対する反論なり関連ということがあるので、1部の出席者はそのまま壇上において、2部は主役をフロアのマイクで発言される方にする。議長は力技が必要だと思うが、構成としてはそのほうがいい。この構成だと、2部でコアメンバーが討議するのを見せるというか聞かせるという位置付けが、何か誤解されるかなと思う。

（木元座長）

- ・ 前回、コアメンバーが発言、討議する場がないというご意見があったので、2部にあえて皆さんのご意見という形に仮に置いた。吉岡委員がおっしゃったように、コアメンバーが呼び出した方々と討議するとすれば、1部のほうがいいだろうか。

（中村委員）

- ・ 言葉の定義の問題もあるが、コアメンバーが討議するのは基本的にはこのコアメンバー会議だと思う。公開の場では、コアメンバーの位置付けはやはり市民参加を促し、原子力行政への橋渡し役というか提言役というか、調整役という位置付けだと思う。そうすると、1部のほうでパネリストの皆さんのご意見を聞き、パネリストのご意見なり物の見方というのを会場の皆さんに明確に伝えるための、補助的な役割ではないかと思う。だから、討議をするというよりは論旨を明確にするとか、どういう方がパネリストになるかにもよるが、そのご専門を背景にした、本件あるいは原子力行政、原子力広報というものに関わるご意見を引き出すとか、そういう役割かなと思う。このテーマについてはいろいろな形のアプローチがあり、いろいろなご意見がある。ご意見に対しても、そういう受け取り方もできるのかとか、そういうアプローチの仕方もあるのかと、一般市民の皆さん、つまり会場の皆さんに思っていたくための役割をコアメンバーがすべきなのかなというのが私のイメージである。
- ・ コアメンバーは、第2部もパネリストと一緒に壇上において構わないと思う。「あなたはどのようなつもりでああいうふうに聞いたのか」とか「あなたの聞き方は違っているのではないか」といったように、コアメンバーに対するご発言も会場から当然あり得るわけで、それを含めて2部はやるべき。我々が会場の皆さんと討議するわけではなく、そういう形で設定すると意見交換が可能かなというイメージである。

（木元座長）

- ・ 分野の違うお立場からご参画いただいているコアメンバーなので、何人かご出席いただいた時に、「Aさんの考えとBさんの考え方は違うではないか」ということもあり得るかもしれない。いろいろなことが考えられる。

（加藤委員）

- ・ 結局、コアメンバーというのは何なのかということ。私自身ここにいてよくわからないというのも無責任な言い方だが、正直言ってよくわからない。中村委員がおっしゃったような役割だろうとは思いますが、おそらくコアメンバーというのは必ずしも原子力についての専門家ではなくて、意思決定だとか、あるいは広報の仕方とか、何かそういう面である程度提言なり、知識を持っている人間としてどうかということをする役割だと私は思っている。その橋渡し役であれば、今の意思決定の仕方だとか、あるいは説明の仕方ということに関して、ここはこうしたほうがいいのではないかという意見を言う役割でないといけないだろうと思う。ところがその役割はまだ、少なくとも私はやった記憶がない。

（木元座長）

- ・ まだその段階まで至っていないというのが実態である。

（加藤委員）

- ・ おそらくフロアにいる人たちから見ると、コアメンバーだとか、あるいはこの第1部の構成員だというのは、あまり区別がつかないのではないかと。一括して、どうせ皆役所が選んだ人たちだろうと映るのではないかと。だから、それがはっきりわかるようにしておかないと、何か入れかわり立ちかわり、最初何人かでやって、またコアメンバーとかいう人たちが何かやって、何なんですかね、というふうになったのでは、せっかくこういうコアメンバーをつかって、橋渡し役をしてきちんと意見を聞きましょうという仕組みが、そもそも理解されないという感じがする。
- ・ どうやればいいのかというのは私はよくわからないが、吉岡委員がおっしゃったように、第1部の中にある程度ここで言う1部、2部を入れて、後半はディスカッションというのが基本的にはいいと思う。その時に、1部のやり方をちょっと工夫しないといけないのかなと思う。例えば場所を右と左に分けて、こっちがパネリストで、こっちがコアメンバーで、このコアメンバーの人たちはいわば裁定役みたいな形で、聞き役であり、真偽を正したり、あるいはご説明をしたり、というようにすればいいのではないかと。

（木元座長）

- ・ 正すと言うと誤解が生ずると思うが、「あなたのご意見はこういうことですか」と確認する、深めるという意味での立場をとりたい。
- ・ 最初に市民参加懇談会のコアメンバーということでご説明したつもりだが、まだあいまいなところがおありになるのではないかと思う。今おっしゃったようなことをイメージしているわけだし、それぞれの能力を持った方をお願いしているわけで、いろいろなお立場の方がいらっしゃるので、そういう複眼的な視点からまとめ役をしていきたい。それでその結果を原子力委員会に提言するという。今のご意見でそれは困ると思ったのは、役所が選んだ人が並んでいるのではないかとと思われるような形に持っていくのは、最も避けるべき。コアメンバーが選んだ方たちである。

(加藤委員)

- ・ 聞きに来る人は、やっぱりそうってしまうのではないか。

(木元座長)

- ・ 思っているとすれば訂正すればいいし、訂正しなければならない。他でやっているのと同じではないものをやろうとしてきている。

(加藤委員)

- ・ 訂正は、各委員がやるということなのか。

(木元座長)

- ・ 各委員というより委員会として、市民参加懇談会として違うと説明していくことと考える。

(加藤委員)

- ・ 今まで何回か地方で(懇談会を)開催した時も、もっとやるべきだったのではないか。私はなるべく原子力委員会そのものではないということを、きちんと出すつもりで発言している。

(木元座長)

- ・ それでよろしいのではないかと思う。
- ・ まだ努力が足りないという面はあるかもしれない。しかし、加藤委員もご参加の刈羽で共同開催した時も、開催場所、日時、パネリストも現地の方と一緒に選んだ。中村委員、碧海委員、小川委員も行ってくださったからよくわかっていると思うが、3回ぐらい討議して選んだ。そういうプロセスを知っている新聞社・放送局は、ちゃんと報道してくださっている。これはいつものとは違うものだというのが、マスメディアの中でも認知されてきた、と私は思っている。それでもまだ役所が選んだ人間が出ているではないかということだと、この試みは死んでしまう。ご不満やご疑問があれば、どんどんおっしゃっていただきたい。

(小沢委員)

- ・ そういう議論で、そこから先に行かなくて、何となく漠然と宙に浮いている。どういう形で出すかというのなかなか難しい。

(小川委員)

- ・ 私は刈羽の時とこの前の東京の時も参加したが、きちんと最初に座長がコアメンバーというのはこういう位置付けだとか説明していたはずで、私自身も納得して、意見を言う立場ではないし、パネリストというか、ご自分の意見を持っている方の立場と、それから会場の一般の立場と、コアメンバーの立場というのは、私なりにわきまえていたつもりである。

(加藤委員)

- ・ 私はそれなりに納得しているから来ているわけで、私はいいのだが、聞いている人がどれだけ納得しているかということが問題だということである。

(木元座長)

- ・ 納得していないという声はまだ来ていないが、そういう方もいらっしゃるかもしれない。

(加藤委員)

- ・ 常にかなりの方がそれでも納得していない、という前提でやり続けるしかないと私

は思う。

（中村委員）

- ・ 納得していないというか、認識していないという部分は、加藤委員が言われるとおりだと思う。少なくとも、あまり認知度は高くないということを前提にいたほうがいいということは確かである。

（木元座長）

- ・ あえて申し上げさせていただくと、原子力委員会の中で、いちばん接点を持って一般の方の意見を反映しようという役割を認知しているのは市民参加懇談会だという評価があって、大臣のご発言でもきちんとおっしゃっていただいた。他のいろいろな専門部会があるが、それとは全く別の形でやらせていただいている。だいたいが認知されてきていると感じるし、納得もいただいていると言える。予算についても、市民参加懇談会はこの形で実施し、内容に関してはコアメンバー会議に任せていただき、予算をつけるからがんばってほしいということも言っていた。

（中村委員）

- ・ ただ、一般の方の認知度は高くないのではないかな。

（碧海委員）

- ・ この市民参加懇談会は、まだまだにしても、ある程度認知されてきているとは思いますが、しかし、コアメンバー会議は、つい最近我々自身も市民参加懇談会とコアメンバー会議のタイトルを変えたぐらいで、区別みたいなものが最初からきっちりできていたわけではない。そういう意味では、コアメンバー会議というのは一体何だということは、一般の人にはまだまだわかってもらえないだろうという気はする。
- ・ 私はここに出ていて、何かこの委員会としてまとめる、結論を出すというのは、例えば、次にこういう市民参加懇談会をやりたいとか、そのテーマをどうしようとか、どういう運営にしようとか、そういうことについては、反論はあるにしても、ある程度最終的にはまとまると思う。しかし、原子力やエネルギーの問題については、私自身は、例えばこの委員会では他の方たちと意見を合わせなければならないと思うことは全くないから、その点では自分は自分である。だから、そういう立場の委員だということはもう少し一般の人にわかってもらう必要があるというのは、刈羽の時も、その後柏崎で事前の打合せを行った時も思った。つまり、反対をしたい方にとっては、相手は皆同じ穴のむじなだと見たほうがいいわけだから、こっちはそれは違うと思っていなくても、そういう扱いをされてしまう。

（木元座長）

- ・ 加藤委員がおっしゃったような部分がそこにあることは事実である。我々が乗り込んでいっても、「あなたたちは役所の決めた人間でしょう。だから言うことは決まっているんでしょう」と言われることもある。前回も申し上げたが、走りながらやっている部分があるのは事実だし、まだ不備な点はたくさんある。だから、ご疑問はぜひおっしゃっていただきたい。

（小沢委員）

- ・ この11月に開こうとしている市民との懇談の場の主催はどこなのか。原子力委員会の主催なのか。

（木元座長）

- ・ 主催は、原子力委員会・市民参加懇談会。この懇談会が主催である。

(小沢委員)

- ・ そうすると、コアメンバーが主催するということで、市民参加懇談会はちゃんと責任を持たなければいけないのではないか。

(木元座長)

- ・ コアメンバーの協議によって懇談会のあり方が決まっていく。今までのように、例えばマニュアルがあって、事務方が決めて、それをそのまま実施するということは一切なくて、ゼロから議論し検討していくのだと思っていただきたい。だから、ごくしゃくする部分も多々あるし、まだそれぞれのイメージも違ったり、コアメンバーというのは何なんだろうという疑問をまだ持っている方もいらっしゃると思う。そういう状態である。

(加藤委員)

- ・ 私はその趣旨と、それから、そういうことを大いに努力していますよ、というのはいいと思う。例えば開催する時の広報の仕方だとか、そういうもっと具体的なところで、原子力委員会の主催ではないですよ、ということをはっきり出す工夫をする必要があるのではないかということ。役所の広報紙に載ったり、何かそういうところに掲示されたりということしていくわけだろうから。

(木元座長)

- ・ 資料 6-2 の 9 に書いてあるが、新聞広告やホームページ。原子力委員会・市民参加懇談会で、原子力委員会から予算が出ている会だから、原子力委員会のホームページは使う。「原子力委員会がやっているから、また同じ穴の中のむじなじゃないか」というふうに思われがちだから、別立てにしたほうがいいということか。

(加藤委員)

- ・ そこをどこまで切り分けられるかというのは、実際には事務局が要るわけだし、100%は無理だろう。

(木元座長)

- ・ それはつらいところ。原子力委員会というのは自主・民主・公開を原則として、自分たちが企画して、立案して、決定するという権限を持っている。だから独立した原子力委員会である。その中で、市民との接点を持つ独立したこういう会を持つということで発足しているので、原子力委員会はどうしても絡む。絡むが、予算の関係だけということでおわかりいただければありがたい。しかし、一般の人はそうはとらないだろうというのもわかる。しかし、やっぱりそうしていかなければ、原子力が要るにしても要らないにしても、国民が納得したエネルギー行政というのはできないだろう。要る、要らないも含めて全部を、コアメンバー中心にして市民の意見を吸い上げていこう、それを行政に反映させようと考えている。

(吉岡委員)

- ・ 毎回言ってきたことだが、コアメンバー会議の役割は市民意見を踏まえた政策提言と、市民参加に関する政策提言を行うことである。その内容によっては、もしかしたら国民にいい組織だと評価してもらえるかもしれない。今のところは何も提言していないわけだから評価のされようがないので、早く独自色を出した提言を行うというのが我々にとっては緊急の課題であって、今年度中に何かやらなければいけな

いだろう。大きい場で自由討議をやるというのは、効率よく意見を吸い上げる手段だと思っている。

（木元座長）

- ・ 最初に申し上げたように、私たちは原子力委員会に、報告書と提言を出すということを決めた。それを出す時期として、今年度中にとおっしゃったが、この今の段階で出せるだろうか。

（吉岡委員）

- ・ まだ煮詰まり方が足りない。本来なら、もう2年目だから普通の組織なら何か出さなければ存在意義を問われるということになりかねないが、今の状況では無理かなという実感はある。

（木元座長）

- ・ もう少し実績を溜めたい。

（中村委員）

- ・ 提言までには、市民の声を聞く場をもっと積み重ねたい。だから今回は特に大事で、2部はそっくりそれに充てるといいと思う。

（木元座長）

- ・ 本当に残念なことだが、刈羽で2回目をやろうと現地と合意しているが、ペンディングになっている。柏崎にもあれだけ通っていて、さあやろうということになっていたが、東電のことがあって、先延ばしということにならざるを得ない。福島は福島で、今のような状態で話ができなくなってしまったという、大変残念な状態になっているのが事実である。また、前回小沢委員がおっしゃったように、東京で、東電の問題を中心というのも1つの大きなイベントというか、大事な役目である。実績は本当にもう少し重ねたいと思っている。

（露木委員）

- ・ 立場ということを踏まえて申し上げれば、このコアメンバー会議というのは、全体としての大きな役割は、前にも申し上げたと思うが、広聴ということだろうと思う。市民参加懇談会のコアメンバーだから、我々の立脚点というかスタンスは、常に市民の側にあると、私は少なくとも自覚をしているつもりである。ただ、加藤委員がおっしゃったような、他の人たちがどう見るか、あるいは会場の参加者がどう見るかという問題はある。つまり、我々はコアメンバーとしてここに集まってはいるが、それは市民から選ばれたわけではない。要請されて自発的にここに参加をしているが、市民から選ばれたわけではないというところに、市民の方々が我々をどう見るかという目線があるだろうと思う。
- ・ 私は、コアメンバーは広聴のまとめ役であり、いわば情報の交通整理役だろうということを自覚しているつもりだが、あとは我々が信頼されるか、されないかということ。例えばこの11月の懇談会がどういう内容で行われるかということに尽きると思う。吉岡委員がおっしゃった政策提言というのは、まだ私はほど遠いような気がするので、その政策提言をする前にやはり広聴という姿勢をどのくらい示せるか、この懇談会の内容をどういう形にできるのか、ということだろうと思う。
- ・ ひとつには、今、市民が何を求めているか、それをどうこの会に反映させていくかということだろうと思う。「報告書が出ました、でも厚くて、読みこなすのはとて

も普通の人にはできません」とか、「書いたものではどうも実感が伝わってきません」、「文書では責任の所在がどうしても不明確になる、もって回った言い方になっている」というような感想を皆さんが持っているとするれば、やはりこの席には東電と保安院の人には絶対出てきてほしい。つまり、直接生の声を聞きたいというのが、今の市民の欲求ではないかという気がする。必要に応じて待機するということになっているが、そうではなくて、必ず出てきていただきたい。生の声を市民にぶつけてほしい。それが1部がいいのか2部がいいのかは、私もまだこれから考えなければいけないと思う。

- ・ 2部では、参加市民からの意見を聞くわけだから、この文章で言えば、2部は会場の参加市民から意見をうかがい、必要に応じてコアメンバーが討論に参加する、という言い回しの文章になるだろうと思う。その時は、我々コアメンバーがもし参加をしていれば、その人たちは壇上から降りてもいい。そういう区切りをつけて、壇上から降りて一般の席に移って、市民の声を優先的に聞いていくということも構成として考えられるのではないかという気がする。

（木元座長）

- ・ その場合、時間配分は、後のほうに多くとるということか。

（露木委員）

- ・ 恐らくそうなるだろう。もちろん休憩は間に入れて。

（小沢委員）

- ・ 私は提言にこだわる必要はないと思う。自由に討論をできる場あるいは、本当に話ができる場だと人が思えば、そういう場は皆大事にしてくれると思う。だから、自由な活発な討論をコアメンバー自身もしていないと保証はできない。自分たちがちゃんと情報公開されていて、内部で自由な討論があった時に初めて、私たちがつくる会議もそういうものになるのであって、やはり今までのところ、コアメンバーの議論が足りなかったかもしれない。逆に、このままの雰囲気を持ち越されると、かえっておもしろいかもしれない。コアメンバーがばらばらにいろいろなことを言うのは悪いことではないし、自由に発言するというスタンスなら構わないと思う。
- ・ ただし主催者だから、主催者としての体裁は整えておかねばまずいのではないか。どっちへ行ってしまかわからないのはやはりまずいので、市民懇談という形がとれるように、コアメンバーとして最大限努力をする必要があるだろう。
- ・ 提言というのは、エネルギー政策とか、そういうところにまとまって出すということか。

（吉岡委員）

- ・ 私のイメージしているのは、総論的な原発についての賛否に、深くどちらかに偏るところのない、オリジナルな論点で合意できるところをできるだけたくさん、両論併記の形で構わないと思うが、何か出して、原子力委員会と真剣に討議をするということ。

（木元座長）

- ・ それは実績が伴ってからでないと、出せないと思う。私はまだまだ不安である。
- ・ 前回、聞くばかりではなくて自分たちもその場で話し合いたいというご意見が出たので、あえて事務局はこういう形にしたと思うし、私も言った。お示した案はあ

くまで土台だから、どんどんご討議いただきたい。今、形がだんだん見えてくる状況になってきたと思う。

- ・ 露木委員がおっしゃったように、確かにこのコアメンバーは、市民から見て、市民から選ばれたメンバーという認識はないかもしれない。ここまでの経緯では、いろいろな団体にお声をかけた。委員間でご推薦があった方には個人的にお声をかけたが、その他、例えば原子力資料情報室などにも声をかけた。その場合に、例えば吉岡委員のお名前が出たり、他の方のお名前が出たり、ご自分は辞退するというのがあったり、いろいろ紆余曲折があった中でこのメンバーがそろったということだ。またご推薦があればどんどん入っていただいてもいいと思う。だから、制限もないし、自由にご発言いただくことを逆に望んでいるので、そこはご認識いただければ幸いである。露木委員がおっしゃった、市民が何を求めているかという部分を、私たちはなるべく聞き取って吸い上げて、そして自分たちで討議して、提言して行政に反映させることができれば、役割が果たせると思っている。

（小沢委員）

- ・ エネルギー問題については賛成も反対もいろいろあるが、やっぱりちゃんと話をしようという時、吉岡委員が言うように、どちらかに加担するというのではなくて、何か有意義な道を、オルタナティブを選ぼうという考えがあると思う。しかし今の状況では、そういう話をするたびに、後ろでバケツをひっくり返したり、今度のようなことが起こって、要するに、工作活動をしていたのに、後ろで認めて謝ってしまって、帰るところがなくなった工作人員のようになってしまう。話がそこへ行ってしまったら、エネルギー問題なんて言っても進まないだろう。
- ・ そういう状態をどうすればいいのか、ここでは自由な討論と言っているが、ＪＣＯの事故があった時も、人が２人も亡くなっているわけだし、土地問題で訴訟を起こされているなど、そういう問題も絡む。今度の問題は、傷が大きいとか小さいとか、新品同様にしておけとか、何かいろいろ言うてはいるが、一般の人はＪＣＯとの連続で受け取るだろう。そうすると、討論しようにもその入り口で突っかかってしまう。それをどうすればいいのだろうか。誰にどう見られようと、どこの手先と思われるかと全然構わないが、議論がどこまでまともにできるのかということ。

（碧海委員）

- ・ 例えば刈羽村で開催した時に、前半の発言は村会議員の方とか、結局はそういう人たちの発言が多くて、ようやく後半で少し一般市民の方の発言があった。このコアメンバー会議の役割は、そういう一般の人たちの声を出させるために、この市民参加懇談会をどう企画して、どう運営したらいいかということに対して、具体的な意見を言うことではないかと思う。吉岡委員とはちょっと違うが、私は最終的に政策提言までまとめるというようなことは全然考えてなくて、むしろこの間の市民参加懇談会はこの部分がまずかったのではないか、ここはもっと直したほうがいいとか、そういう意見を言うことが私の役割ではないかと思っている。
- ・ もちろん最終的には、一般市民の声をどれだけ拾い上げられるか、反映させられるかで、それもある種の人たちではなくて、一般市民の声をどれだけ拾えるかということには力を尽くしたいと思う。

（加藤委員）

- ・ 先ほど小沢委員がおっしゃったことについてだが、おそらくこの会議自体は原子力に限られているので、かなり制約があると思う。本当は原子力だけでなくエネルギー全体を考えるべきだと思う。政策決定プロセスというのはものすごくリジッドなために、無理が出てきている。その無理が、やはりいろいろなところで吹き出してきている。エネルギー全体についてまでここで議論できるのか、できないのか、そこは制約があるのかもしれないが、原子力についてのみでは限られた議論になってしまう恐れがある。
- ・ ではどうするかというと、今回の11月のはおそらくあまり時間がないし、原子力に関しては、かなり感情的に物を言う人も多いだろうから難しいとは思いますが、もしできれば、主催者は、あらかじめこういう会議を開くということ自体を、地元などの団体があれば共催の形にするとか、どういうテーマについてやりますとか、出席者についても両方で検討するようにすればいいのではないかと。そうすれば、役所主導でやっているのではないというニュアンスを出せるのではないかと思う。
- ・ 先ほど吉岡委員がおっしゃった提言というのは、これは皆さんそれぞれいろいろなご意見があっていいと思うが、私は、原子力政策の中身についての提言である必要はないだろうと考える。意思決定のプロセスという決め方の問題について、いろいろなこういう催しをやる中で意見を出していくのか、まとまった形の提言がいいのか、私はよくわからないが、意思決定の仕方について、コアメンバーから明確なものはまだ示せないのかもしれないが、そういったものを示したほうがいいのではないかと思う。皆さんそれぞれいろいろな場でご経験がおありだろうから、そんなに経験を長々と積んでなどというずっと先になるから、ばらばらであっても、ある程度個人の意見という形でも何か示したほうがいいのではないかと。

（木元座長）

- ・ そのとおりだと思う。

（加藤委員）

- ・ 例えば、この11月にこういうことをやるという、その開き方についてこんな意見も出ていますということ自体を、もっとオープンにしていきたいと思います。

（木元座長）

- ・ 今、もう既にオープンである。

（加藤委員）

- ・ オープンというのは、ホームページが何かに出るということであれば、ホームページなんていうのは見る人は少ないし、議事録なども読まれない。1枚の紙にして、今度11月の時に配るとか、そういった方法も考えたほうが良い。

（木元座長）

- ・ それはできる。今のご意見について、少し言わせていただくと、共催の形でやろうということは当初から既にやってきている。福島や敦賀にもやりましょうということで、いろいろな話も出て、まだこれは継続している。共催でやるというのが市民参加懇談会の原点である。
- ・ それから、原子力の日、例えば議員立法でエネルギー政策基本法をつくったので、それぞれ立場は違うが、国会議員の方々による討論をやってもいいのではないかと、いう案も出た。しかし、それはおもしろくないという小沢委員からのご意見もあっ

たし、他の方からのご意見もうかがい、東京電力の問題は今最もホットなことだからこれをやろうということが前回のコアメンバー会議で決まった。だから、いろいろな懇談会の形がある。その1つとご理解いただきたい。地方の方々とは話し合っていてやっている。

- ・ さまざまな議論を展開して、走りながらやっていく。形がまだ決まっていない部分があるというのは事実である。だから、いろいろやってみて、ご意見を吸い上げるにはどういうフォーマットがあるだろうということを討議する、とご理解いただければありがたい。旧態依然のマニュアルで動いているのではない、ということだけはわかっていただきたい。

(加藤委員)

- ・ やはり、世の中に対してそういうことを理解してもらうことが重要だろうと思う。

(木元座長)

- ・ 原点は、「手づくり風」である。だからいろいろなご疑問やご不満も出るだろうと思うが、そこをご理解いただいてやる以外ない。
- ・ いろいろご意見をいただいたので、少し方向性を出していきたいと思う。開催日は11月ということで、間に合うだろうか。会場の都合もあるので、12月まで延ばしたほうがいいのか。

(中村委員)

- ・ 都内なら都内と決めて、規模を決めて、会場がとれる日しかもうないと思う。11月中のほうがベターだが、11月中はどこもいっぱいだったらしょうがない。

(木元座長)

- ・ 11月終わり近くで努力してみる。
- ・ 規模は、500名は要らないだろうか。

(中村委員)

- ・ 私の考えでは、フロアというか、会場の皆さんというのは聴衆ではなくて、やはりご意見を発表していただく、あるいは他の人の意見を聞いていただくということだから、講演会ではないので、参加性を重視すると300名ぐらいが限度だと思う。500名だと、会場の雰囲気は何か一方的な、講演会のような雰囲気になってしまう。200から300ぐらいだと、一緒に考え、一緒に意見を言い合っているという雰囲気がつくれると思う。2部の進め方についても考えがあるので、300ぐらいがいいと思う。

(木元座長)

- ・ 300名以内ということでいかがだろうか。

(小川委員)

- ・ 私はなるべく少ないほうがいいと思う。

(小沢委員)

- ・ 500人いたって1,000人いたって、関係者が多いと静かなものだ。

(木元座長)

- ・ 仕切りが大変だというのは、イメージでわかるし、本当に大変である。一斉に意見が来た時に、どういう順に指すのか、「こっちを先に指しただろう」というような不満が出てくるようなレベルだとまいてしまうということ。

(中村委員)

- ・ いずれにしろ、会場に参加していただいた皆さんの意見を聞く会だということを強調した公募の仕方をしてほしいと思う。パネリストの討論を聞きに来る会ではなくて、それをきっかけにして会場から発言のできる会だということ。だから、変な言い方だが、原子力産業の方が情勢をうかがいに来てあまり意味がないですよということ。発言する意思がなければ来てもあまり意味がないし、発言はしないまでも、市民として一生懸命人の意見を聞きたいという姿勢の方をウェルカムですよ、ということを確認にすればいい。「あなたも発言してみませんか」みたいな呼びかけがいいと思う。

(木元座長)

- ・ 「発言をお待ちしています」とか。

(中村委員)

- ・ 我々コアメンバーということで市民参加懇談会が皆さんの声をお聞きする会を開きます、という趣旨を打ち出した形で、インターネットなりフリーペーパーなり、予算があれば広報できるかもしれないが、そういうふうになれば参加してくれる方の参加性というのは非常に高いものにできるのではないか。

(碧海委員)

- ・ 今度私たちが、大阪で「暮らしと放射線」というフォーラムを開催するために、大阪のドーンセンターという会場を借りた。東京でいえば、ウィメンズプラザのような場所である。この間の主婦会館は、足場は良いが会場の条件がふさわしくないの、私はあまり勧めたくないが、ウィメンズプラザにしても、大阪のドーンセンターも、会場そのものが他の催しで絶えず一般の人たちが集まっているようなところである。そういう会場をなるべく押さえてほしい。そうすると、そこに情報を出してもらえ可能性があるだろう。

(小沢委員)

- ・ お台場のビッグサイトや東京国際フォーラムなどは避けてほしい。

(碧海委員)

- ・ いかにもという感じではないところで、できれば私は階段状がいいと思う。

(木元座長)

- ・ いずれにしても東京ということによろしいか。

(中村委員)

- ・ そのほうが消費地ということでもいいのではないか。

(露木委員)

- ・ 「あなたのご意見を聞かせてください」というフレーズを、やはりどこかに会の趣旨として入れておいたほうがいい。

(小沢委員)

- ・ 「あなたも一言言ってください」のほうがいいのではないか。

(木元座長)

- ・ 後日、事務局で案をつくってFAXを送るので、ご意見をいただきたい。
- ・ 会場は、事務局で責任を持っていくつか11月の中旬から終わりであたってみる。
- ・ それから構成について、中村委員が先ほど2部に案があるということだったので、ご発言いただきたい。

（中村委員）

- ・ 1 部についてはパネリストとコアメンバーで、露木委員のご意見を入れるとすれば、やはり説明者というか当事者が必要である。保安院と東京電力からダイレクトがいいのかどうかについては、実は、資料 6-1 の C というのが私の意見で、直接長々と言い訳されるよりは聞き取りのほうがいいかなと思ったが、それはお任せする。コンパクトにちゃんと答えていただけるなら、当事者のほうがいいに決まっている。

（木元座長）

- ・ 私の考えもそうだが、説明者を置くというのは、当事者が話す時間がもったいないということ。だから、レポーターで誰かいないだろうか。こういうことがありましたということでまとめて、10 分ぐらいで時系列的に説明をして、保安院からこういう結果が出ました、東電からこういう結果が出ましたということを報告し、当事者は後ろにいる。パネリストの後ろでもどこでもいいから、必ず説明する責任を持って出席していただくという形がいいかなと思う。その説明者を誰にするか。この中の誰かがやるとか。

（小沢委員）

- ・ 中村委員にやってもらったらいいのではないか。

（中村委員）

- ・ それは別として、第 2 部はコアメンバーが参加していただいた市民の皆さんの意見を聞くという姿勢を明確にしたいので、パネリストには第 2 部は降りてもらう。お帰りになってもいいし、他の方と一緒に座っていただいてもいい。ステージの上に残るのはコアメンバーと議長と説明者。説明者はあくまでもスタンバイということ。コアメンバーが会場に呼びかけて、第 1 部でこういうのが出ましたけれどもということで、当然いくつか大きなくりのテーマ設定をする。それに従ってどうですかということで発表していただいて、コアメンバーは会場の皆さんとの意見交換をする。しかし、基本的には聞かせていただく。逆を言うと、説明者は事実関係を正された時などのためにいて構わないが、コアメンバーが聞くのだから、他の人はあまりステージにいてもらっては困るということ。設定としては、例えば 1 部では、議長を真ん中にしてパネリストが上手で、コアメンバーが下手にいて、少し離れて、上手の奥にでも説明者にいていただく。2 部になるとパネリスト席がなくなって、コアメンバーがメインになって会場の皆さんと、という形になる。

（木元座長）

- ・ そうすると、会場には、先ほど言ったようにマイクを立てておくだけでいいということか。

（中村委員）

- ・ マイクは立てたほうがいい。通路ごとに 2 本ぐらいずつで、4 本か 6 本ぐらい。

（木元座長）

- ・ それで手を挙げていただいて、発言してもらおうということ。

（中村委員）

- ・ 私たちが聞きますという姿勢が明確になるようなステージ設定にしたい。

（木元座長）

- ・ 私は、横浜で内閣府のタウンミーティングの司会をやったことがあるが、仕切るの

が大変だった。そういう状況になればありがたいが、その時に「壇上にいる人に向かって言うのは嫌だ」という人がいた。だからフラットにしてほしいということだったが、碧海委員がおっしゃったように階段状になっていて、舞台が低ければいいと思う。

- ・ そうすると、2部は、パネリストなしでコアメンバーと説明者がいて、市民の声を中心に設定するということでもいいだろうか。

(小川委員)

- ・ 1部は、パネリストとコアメンバーのやりとりがあるということで、コアメンバーも一緒に壇上にいるということか。

(中村委員)

- ・ 段取りから言うと、せっかくお招きするのだからパネリストのご意見が優先である。

(小川委員)

- ・ コアメンバーがずっといるというのが、何となくうっとおしく感じるのではないか。

(木元座長)

- ・ 説明しておけばいいのではないか。「私たちは皆さんのご意見を聞く立場なので、恐れ入りますが壇上に座らせていただきます」ということでご理解いただければいいと思う。だから、1部でやりとりというよりも、とにかくお聞きして、わからないところがあれば、お話をもっと深めていくということに徹する。

(中村委員)

- ・ ただし、このメンバーが全員出席して勢ぞろいしてしまうと威圧的になってしまうので、コアメンバーも、パネリストの数プラスアルファぐらいの人数がいいと思う。13人も並んだら、それはやはり威圧的である。ご意見を聞くというよりも、違う印象を与えてしまう。

(小沢委員)

- ・ しかし、全員は来ないだろう。

(中村委員)

- ・ どちらかという、コアメンバーは小沢委員 1 人いれば十分かなという感じもある。

(碧海委員)

- ・ 会場に、コアメンバーとわかって構わないから、分散して座ればいいのではないか。

(木元座長)

- ・ 壇上に何人かはいたほうが良いか。

(中村委員)

- ・ 壇上は本当に、パネリストが3人だったら、こちら2人か3人ぐらいがいいのではないか。

(小川委員)

- ・ そのぐらいがいいと思う。

(中村委員)

- ・ コアメンバーは前のほうに座っていただいて、第2部のためのトレーニングというか、ウォーミングアップで、下から発言してもいい。そのあたりは司会者というか議長が踏まえていて、「会場のコアメンバーから質問などありますか」というような進行に持って行って、1部の時から、フロアから発言するのは特殊なことではな

いという雰囲気をつくる。コアメンバーというのは皆さんと一緒に、皆さんのご意見を聞くために 1 部でこういう立場でいますよ、ということをおわかっていただいて、ステージ上のメンバーが残って、前の席には他のコアメンバーもパネリストもいる。変形円卓会議というか、片方がものすごく大きい円卓会議だが、そういう雰囲気につくれないかなと思う。

(碧海委員)

- ・ コアメンバーは前でなくても、会場の中でいいと思う。

(木元座長)

- ・ それは会場の様子などを勘案しながら配置を考えたいと思うが、基本的な考え方はそういうことでいいだろうか。

(小川委員)

- ・ ご意見をうかがうというのにステージにいるというのが、形として、なじめない感じがする。

(木元座長)

- ・ それは私も抵抗があるが、状況としては仕方がないのではないか。

(中村委員)

- ・ 空っぽの舞台というのもおかしいだろう。

(木元座長)

- ・ だから、それは事前に断って、時々メンバーがバトンタッチして交代してもいいと思う。

(中村委員)

- ・ 2 時間は長いから、3 人ずつ 2 交代、3 交代制にしてもいい。

(小川委員)

- ・ それも雰囲気を和らげるためにはいいかもしれない。

(木元座長)

- ・ 基本的にはそういう形で、会場をまず押さえてから、またご相談したい。
- ・ 時間は、4 時間ということではよろしいか。休憩を入れるが、1 部と 2 部の配分についてはまたあとでご相談する。
- ・ テーマについては、先ほど加藤委員が原子力だけでは制約があるとおっしゃったが、基本的には原子力だとしても、エネルギー全体を考えないと原子力は見えてこないという問題もあるので、市民参加懇談会としては当初からエネルギー全体を見ている。ただし、今回の件は、東電のいろいろな不正記載を契機としてやろうということで前回ご提言があって決まったので、今回は絞る。「原子力の安全・安心」、「原子力と情報公開について」と並べてあるが、メインを決めたい。情報公開がいいだろうか。

(吉岡委員)

- ・ 資料 6-1 では私の案は E である。E では「原発カルテ開示」としているが、これは実は狭過ぎるかなと思っている。つまり、いかにも原子力安全委員会的なテーマである。ただし、原子力安全委員会のほうには我々のような組織がないというのは残念なことで、ある程度そちらもカバーしなければいけない立場にはあるが、このテーマでは狭いかなと思うので、意見 D の方向に広げるというのが適当ではないか。

- ・ その1行目に「信頼関係」という言葉が出ていて、まさに信頼関係を裏切り続けてきたという問題である。事業者と政府と自治体と国民一般、それらの間の信頼関係が今崩壊していると思う。信頼関係は安全上の問題がいちばん大きい、単にそれだけではない。福島県などの場合には、安全上の問題だけではなくて、核燃料サイクルの合理的な説明を聞いたとは自分たちは思っていないと言っているし、あるいは東電が設備投資計画を一方的に変えろとか、そういう意味での信頼関係も損なわれていると福島県では考えている。そういうことも含めて、安全も重要だが、それだけではなくて、より広い意味で信頼関係を再構築するということ。

(木元座長)

- ・ 私もそのとおりだと思う。安全と感じたり、安心と感じたり、信頼を損なうというのも、すべて情報がもとである。原子力に関わる、どういう情報を手に入れて、どういうふうに自分は受け取ったかということになるだろう。非開示の面があったから信頼関係を失ったとか、うそを書いていたとか、全部情報である。だから、やはり基本的には原子力についての情報公開とか、原子力情報なのか、何かタイトルをうまく工夫して、例えば、「原子力情報について」だけでもいいと思うし、そういう形で、テーマに「情報」という言葉を使ったほうがいいと思う。

(吉岡委員)

- ・ 基本的に賛成。古い話に戻るが、経済産業省からの説明が紹介された時に、こういう情報の出し方はまずいのではないかと思った箇所がある。そこには10月下旬に中間報告を取りまとめる予定という2つの調査委員会のことが書いてあるが、彼らの中間報告というのは最終報告の意味だと私は思う。それを中間報告として、まだやるだろう、もっと徹底的に調査するだろうと国民に思わせる、これ自体が非常に言葉の問題として改める必要があると思う。

(木元座長)

- ・ 今度そういうことも発言すれば良いのではないかな。そうであれば、やはり情報である。

(碧海委員)

- ・ 情報は、どちらかといえばサブタイトルに入れるような形にしてはどうか。私としては安全・安心というのは反対である。つまり、安全・安心というテーマにしてしまったら、出てくることはもう決まっているというか、何か全然おもしろくないという感じ。むしろ私自身の感じでは、例えば「なぜ原子力は嫌われる」とか、そういうこと。原子力の安全・安心について一般の人の意見を聞きたいのではなくて、なぜ原子力は嫌なのか、だめなのかということ。

(小沢委員)

- ・ 「原子力についてあなたが言いたいことは何か」とか。

(木元座長)

- ・ 最初に申し上げたように、今回は東京電力のことがあったから、それでやろうではないかという話になった。そうすると、そのきっかけになるキャッチコピーみたいなものが必要だと思うが。

(小沢委員)

- ・ 「東京電力の不正記載をきっかけにして」とか。

- ・ 「なぜ嫌われるの」というのは、本当にそのとおりだと思う。皆嫌っている。

(中村委員)

- ・ あまり広がり過ぎではないか。

(碧海委員)

- ・ しかし、一般の人の立場からすると、そのくらいにしたほうがいい。

(木元座長)

- ・ 大きく「東京電力を契機にして原子力情報を考える」として、「～」を付けて、「なぜ原子力が嫌われるのか」とサブタイトル的にやったほうが、こういう視点もあると思ってくれるかもしれない。

(碧海委員)

- ・ 「あなたも原子力が嫌い？」とか。

(中村委員)

- ・ テーマを打ち出さなければいけないから、東京電力とか今のようなサブタイトルなどはいろいろついて構わないが、やはりメインテーマは原子力の情報公開だろう。それにすべてかかっているわけだから。

(木元座長)

- ・ 「東京電力の問題から考える」と、頭にクレジットをつけて、「原子力情報のあり方」とか「原子力情報とは何か」、あるいは「原子力の情報公開について」、と大きくおいて、またこっちに小さく「～なぜ原子力が嫌われるのか」とか「嫌いですか」とか「嫌ですか」とするか。

(小沢委員)

- ・ あまり並べても困るが、情報公開なのか。

(木元座長)

- ・ 「情報公開」は言い古されている。

(小沢委員)

- ・ 国に報告しなかったのも情報公開なのか。

(小川委員)

- ・ その問題になると、一つ一つ本当に言わなければいけなかったことなのかとか、いろいろある。

(木元座長)

- ・ 意見Cにある、「原子力の情報公開とは」ならわかる。

(中村委員)

- ・ Cは私の意見。

(小川委員)

- ・ 私は意見Bだが、アメリカに行っていたので、アメリカの品質レベルと日本の品質レベルとが全然違うことに驚いた。しかも向こうのほうが運転成績がいい。

(木元座長)

- ・ 品質レベルの許容が違うということ。細かいところになってしまう。どこまで出せるかということは「情報のあり方」である。

(碧海委員)

- ・ だから、「嫌い」というのは極端な言い方だが、原子力について自分の意見を言う

だけの環境というか、それこそ情報も含まれるわけだが、そういう状況にちゃんと置かれていますかということ。

(木元座長)

- ・ そうすると、いつも言っているようにメディアリテラシーの問題になる。
- ・ だんだん収斂してきたような気がするが、「原子力」をつけて「原子力の情報公開とは」というのはどうか。

(碧海委員)

- ・ 「情報公開」という言葉は使いたくない。「情報」という言葉はいいが、「情報公開」という言葉は、これはもう既に専門家の言葉である。

(木元座長)

- ・ 「原子力情報とは」、「原子力情報について考える」とか。

(小川委員)

- ・ 先ほどの「なぜ嫌われるか」というのは、メインタイトルとして生きているのか。

(木元座長)

- ・ 上に「東電を契機に考える」というのを、少しうるさいけれども付けて、メインに「原子力の情報について考える」とか「原子力の情報について」とか「原子力情報とは」とする。

(吉岡委員)

- ・ 私流にもっと説明的にすると「原子力情報の信頼性について考える」ということだろうと思う。

(小沢委員)

- ・ もう少しキャッチコピー的なほうがいい。

(碧海委員)

- ・ 一般の人は、大体そんなに考えていないから。

(木元座長)

- ・ 「信頼」をつけてもいいが、中で話す話だから、あまり具体的に表に出さないで「何をやるの。私でもこれなら発言できるわ」というような感じにしたい。
- ・ 「情報」は使っていいか。東電だから使わなければならない。いくつか候補を考えてみる。

(小川委員)

- ・ 「あなたが望む原子力の情報」とか。

(木元座長)

- ・ それは教科書的に聞こえないか。

(中村委員)

- ・ 「公開」の言い換えということ。だから「公開」というよりも、コミュニケーションとか、欲しいものが手に入るとか、いろいろなニュアンスが含まれているので、碧海委員なども用語として固定化している「情報公開」が嫌だとおっしゃるのはそういうことだと思う。類語辞典などで「公開」を何か言いかえてほしい。単にオープンにすることだけではなくて、何をどう伝えなければいけないとか、何を欲しがって物を答えるとか、いろいろなニュアンスが含まれている。私の「情報公開」というのは少なくとも含んで考えている。それをわかりやすく、もう少し

伝わる表現で言い換えられないかなと思う。

(木元座長)

- ・ 「原子力情報」まではいいか。このあとに付く何かということ。

(中村委員)

- ・ 「原子力の情報何とかとは」「原子力情報を考える」とか、たぶんそのところだ
と思う。

(木元座長)

- ・ 「どうなってるの？原子力情報」というのもあるだろう。

(中村委員)

- ・ 「原子力情報の共有」というのもある。

(小川委員)

- ・ 逆に「原子力情報がなぜ伝わらないか」。

(中村委員)

- ・ そこではなくて、なぜ伝えなかったのかというところが今回の問題である。

(小沢委員)

- ・ 今、運転を停止しているのはどこなのか。

(木元座長)

- ・ 中部電力は浜岡を全部停めている。東京電力は全部は停まっていらないが、定検を前
倒しにしたりして順番に停めている。

(小沢委員)

- ・ しかし、停電はない。

(中村委員)

- ・ 定検の前倒しだから、停電などないように考えている。

(木元座長)

- ・ お金をかけて整備して、停めていた火力も運転している。そういうことも情報。
- ・ いくつか「原子力情報」という言葉を使ってタイトルを考えて、皆さんにFAXで
意見をうかがうことにする。
- ・ 最も肝心のパネリストだが、3名程度と一応書いてあるが、いいだろうか。

(小沢委員)

- ・ 東電はパネリストではなく、説明者になるのか。

(木元座長)

- ・ 説明者というよりも、当事者としてスタンバイしているということ。

(吉岡委員)

- ・ 批判的技術者で田中三彦さんなどいいのではないか。

(木元座長)

- ・ 技術の問題ではなく、情報についてがテーマであるので、どうだろうか。

(吉岡委員)

- ・ 批判的な人も要るという意味で、資料に具体名が入っていなかった所以说ってみた。

(木元座長)

- ・ 客観的に自分のテリトリーを持っていて、それを誇示して、そのみを発言すると
いう人ではなくて、幅広く原子力情報というのはどうしたらいいかということ語

れる人で、何か問題意識を持っている人であればいいと思う。

（碧海委員）

- ・ 私は原子力に限らなくてもいいと思う。情報公開について相当深くかかわってきた方。情報公開は相当理念の部分があるわけだから、その辺をしっかり持っていらっしゃる方がいいと思う。

（中村委員）

- ・ 理念も倫理もある方。

（木元座長）

- ・ 樋口さんというのはおもしろいかもしれない。

（碧海委員）

- ・ 樋口恵子さんの名前を挙げたのは、要するに彼女にも考えてもらいたいということ。高齢化についてあれだけ考えているのだから。

（中村委員）

- ・ どちらかというと、そちらのイメージが強い。

（木元座長）

- ・ 安全委員会は今回どうしようかと思う。安全委員会でないほうがいいかもしれない。
- ・ 樋口恵子さんのようなタイプで誰かというのはあるか。原子力専門家ではないが、世の中でバリバリ話しているような女性でも男性でも。

（吉岡委員）

- ・ 長計の第一分科会でやっていた方がいるのではないか。

（小沢委員）

- ・ 割と批判的に言う人か。

（木元座長）

- ・ 批判的でもどちらでも、客観的に物事をパッパッとと言えるような人がいい。

（小沢委員）

- ・ 円卓会議でモデレーターだった中島篤之助さんなどはどうか。円卓会議で東海村の村長を呼ぼうとしてが、皆嫌がってひんしゅくを買ったということがあったらしい。来られるかどうかはわからないが、彼はよく情報公開の話をなさっている。

（木元座長）

- ・ 「広告批評」の編集長をやっている女性で、島森さんなどはどうか。先日、この件について「ブロードキャスター」でしゃべっていた。
- ・ 意見Bでは弁護士の住田さんも挙がっている。

（小川委員）

- ・ F B Rの懇談会メンバーで、講演をお聞きした時も冷静な方だと思った。

（木元座長）

- ・ あの方は今回、保安院の評価委員会のメンバーだった。報告書で既にある一定のことをまとめている立場になってしまったので無理かもしれない。

（吉岡委員）

- ・ しかし、彼女は内閣府の情報公開審査会の委員もやっておられると思うので、良いと思う。保安院のものは外部評価委員会だから、一応中立ではないか。

（木元座長）

- ・ では住田さんも候補に入れておきましょう。

(中村委員)

- ・ なるべく国関係の委員をやっていない人がいい。いろいろ候補を出していただいて、あとでまとめていただきたい。

(木元座長)

- ・ 法律家というご意見も出たが。

(吉岡委員)

- ・ 日弁連関係で、海渡雄一さんとか、その奥さんの福島瑞穂さんとか。

(小沢委員)

- ・ そんなにたくさん要らないのではないか。

(中村委員)

- ・ 候補者だから。

(木元座長)

- ・ 海渡さんなどはある程度言うことがわかっているが。

(吉岡委員)

- ・ 何のためにパネリストを呼ぶのかというと、明確なオピニオンを聞きたいからだと思う。だから、情報のブローカーよりも主張のある人がいい。

(木元座長)

- ・ 海渡さんなどには、できれば会場から発言してもらいたい。絡んで発言してほしい。

(碧海委員)

- ・ パネリストがあまり強力だと、日本の場合には、皆やはり専門家に教えてもらうという形になってしまう。

(小沢委員)

- ・ 人数を2人ぐらいに少なくしたらいいのではないか。

(碧海委員)

- ・ 対等に自分たちも発言できるという、そういう雰囲気にしてほしい。

(木元座長)

- ・ 今の候補としては、樋口さん、中島篤之助さん、住田さん。海渡さんは、できれば会場からのほうが活発にいくかなという気がするが、あとは誰がいるだろうか。

(小沢委員)

- ・ コアメンバーから、例えば碧海委員とか。

(中村委員)

- ・ 違う分野からということで、リスクコミュニケーションや情報管理ということだと、軍事アナリストの小川和久さんなどはどうか。会場の皆さんも、原子力の専門家にあまり発言されると引いてしまうから、そういう危機管理や情報管理などでもいいと思う。

(木元座長)

- ・ 危機管理だと、佐々さんとか。

(中村委員)

- ・ 情報管理というと内閣調査室長が出てくるという時代でも、もうそろそろないのではないかと思う。

(木元座長)

- ・ そう思う。

(小川委員)

- ・ この方々の発言のテーマというのはいくつかに振らないと、皆同じことを言われても困る。

(木元座長)

- ・ それはまたあとで考えたい。

(碧海委員)

- ・ だから、自分のしっかりしたバックグラウンドがあって、その人がどう考えるかということ。

(木元座長)

- ・ こちらで枠を決めて、あとはもうご自由に、ということで、お互いがやり合ってもいいわけだから。

(中村委員)

- ・ エンジニアというか、機械工学とか、そういう分野の人がいたほうがいいだろうか。

(吉岡委員)

- ・ 技術と法律と経営管理とマスコミぐらい。

(木元座長)

- ・ 多くなってしまう。

(中村委員)

- ・ それであとで3人に収斂すればいいのではないか。

(小沢委員)

- ・ 私はジャーナリストというのはあまり信用しない。何をやっているかよくわからないし、誰でもキャスターとかジャーナリストとか名乗るから。実際に取材している現場の新聞記者が来てくれるのが、本当はいちばんいいと思う。

(木元座長)

- ・ 新聞記者とかテレビ記者とか、いろいろなところでOB、OGになった人を見ると、メンバーの顔が大体わかってきてしまう。中村政雄さんとか鳥井さんとか。

(碧海委員)

- ・ 高橋真理子さんはどうか。

(木元座長)

- ・ 高橋真理子さんはまだ現役ではないか。

(小川委員)

- ・ テーマがこういう種類だと、断られるというのがかなりあると思う。

(木元座長)

- ・ だめもとで当たることもあるだろう。

(小沢委員)

- ・ あまり年配でなくて、しがらみがない人がいい。あちこちの会議に出てしまうとやはりだめだと思う。

(中村委員)

- ・ ジャーナリストは要らないのではないか。小沢委員が好きか嫌いかは別にして、コ

メンバーにジャーナリストはたくさんいるし、キャスターもいる。技術関係の、特に原子力工学でなくて構わないと思うが、サイエンスとかテクノロジーというものをお話できる技術系の方と、それとリスク管理、情報マネジメントだとか、もう1人は法律のわかる人。弁護士なら弁護士でもいいし、その3人ぐらいでいいのではないか。

(木元座長)

- ・ 技術系と危機管理と法律。先ほど名前が出た樋口さんなどは、そうするとどうなるのか。

(碧海委員)

- ・ 樋口さんにこだわっているわけではない。

(木元座長)

- ・ 例えばの話、それ的な人。法律でもいいかもしれない。

(中村委員)

- ・ いわゆる評論家、あるいはジャーナリストというのは、コアメンバー自体がそうだから、そこはパネリストとダブらせる必要はないかなという感じ。

(木元座長)

- ・ 今のようなニュアンスで、これもリストアップしてみる。
- ・ 問題は説明者だが、最初に時系列的に報告する人、レポーターということで、私がやってもいい。

(中村委員)

- ・ いちばんいいのは、木元座長が市民参加懇談会の座長として報告するという立場がいいかなとは思う。しかし議長もやってほしいから、そこが困るが、報告者としてはそれがベストだと思う。

(木元座長)

- ・ 議長はコアメンバーの中から出てやってほしい。
- ・ 説明者については私もいろいろ考えたが、どうだろうか、私というのも可能だと思う。まとめた報告をするだけだから。

(中村委員)

- ・ 第三者だったら、その人はもう1回取材しなければいけなくなってしまう。

(吉岡委員)

- ・ 相談してみたらどうか。高レベルの市民集会でも、プレゼンの仕方自体を両派が話し合って両派が受け入れるような説明様式にした、という経緯があったと思う。

(木元座長)

- ・ 報告を私がするとすれば、当然それを全部お目通しいただいた上でやる。そんなに恣意的なものはやれるはずがないし、私自身もそういうことは嫌いだ。

(吉岡委員)

- ・ 具体的に、特に責任を持つ人は決めておく必要があるのではないかな。例えば加藤委員とか。皆さんには事前に文案を公開して、コメントをいただく。

(木元座長)

- ・ 簡単なペーパーを会場に配付するということで、10分ぐらい私が先に説明させていただく。それから、当事者である保安院と東電ということだが、東電からだけでい

いだろうか。

(中村委員)

- ・ 東京電力からのみでいいと思う。

(木元座長)

- ・ 肝心の司会進行はいかがか。

(中村委員)

- ・ それは難しい。小沢委員がいいと思う。

(小沢委員)

- ・ 私ではなく、宮崎委員あたりがいいのではないか。宮崎委員のほうが、非常にソフトだし、私はもう何度もやっているから。

(木元座長)

- ・ 私はやはり中村委員が慣れていらっしゃるから、中村委員と小沢委員にお願いしたいと思う。1名から2名と書いてあったので。

(中村委員)

- ・ 小沢委員を推薦したい。やはり前回の議事録を読んだら、私は今回はだめだろう。あれだけ批判されているから。

(木元座長)

- ・ 露木委員はいかがか。

(露木委員)

- ・ 日にちによる。

(碧海委員)

- ・ やはり会場が先決ではないか。

(木元座長)

- ・ 露木委員、中村委員、小沢委員、宮崎委員のお名前が出た。

(吉岡委員)

- ・ 2人と提案したのは、4時間は1人ではきついかと思ったから。

(木元座長)

- ・ 1部、2部で分けてもいいということか。

(吉岡委員)

- ・ 適宜交代すればいいと思う。

(木元座長)

- ・ 私などは、自分が司会をしたら通したいと思うが。

(碧海委員)

- ・ 4時間ということで少し心配なのは、一体何時から始めるのかということ。1時から5時だとすると、1時というのは結構集まりにくくて、普通1時半だろうし、それで5時半になってしまうと、もうそれこそ女性などは後半は落ち着かない。

(中村委員)

- ・ 女性は普通限度は4時半ぐらいだろう。

(碧海委員)

- ・ だから、5時半終わりというのは結構厳しいと思う。

(木元座長)

- ・ 4 時半に終わるためには 12 時半始まりということか。

(碧海委員)

- ・ 12 時半の集まりも、大変だろう。

(木元座長)

- ・ せいぜい 1 時だと思う。

(碧海委員)

- ・ 逆に午前中から始めて、お昼休みをしっかりとって、という手もある。

(木元座長)

- ・ 私はそれはやめたい。帰ってしまうし、お弁当を食べる場所とか、問題がある。

(碧海委員)

- ・ ぎりぎり 1 時から 5 時だろう。

(中村委員)

- ・ しょうがないというか、4 時半ぐらいにお帰りになりたい方は、なるべく早く手を挙げてご発言いただく。

(木元座長)

- ・ この間の高レベルの討論会も長かった。私は、ずっと出席していて、やり方を見ていたが、コーディネーターが大変だったと思う。やはり慣れていないとできないと思った。しかし参加者は、終了後も結構遅くまでいた。

(中村委員)

- ・ 自主的に参加されるわけだから、ある程度その日はそのつもりで参加してくれるだろう。

(木元座長)

- ・ 今日、この他に資料 6-3 ということで、市民参加懇談会のイメージを立体的に書いてみた。これについては次回お諮りしたいと思うので、見ておいていただきたい。ご疑問があればまたお寄せいただきたい。

(中村委員)

- ・ 議長というか司会進行は、1 部、2 部で分けてもいいだろうか。

(露木委員)

- ・ 1 時から 5 時というと、結局間の休憩もあるし。

(木元座長)

- ・ 司会進行も、1 部と 2 部で分けることも一考である。休憩を 20 分か 15 分ぐらいで、なるべく 5 時ちょっと前ぐらいをめどに終了することにしたい。

- 後日、F A X 等で、次回の市民との懇談の場についての詳細案を各委員にお諮りすることとした。

以 上